

鶴喜全版
雀平

全六冊前編

三國

市川團十郎作



特別
^13
2378
346

文政七年甲申新板



さん ぶく ぶく ぶく ぶく

三因白狐傳

甲申春新雕 上編

市川三升作
歌川国貞畫

儂鶴堂上梓

元來戲作の繪州紙言とのども、悟道の近徑なる先小
 雷名、諸先生普、好文多、歌討擡とのが、總て史後
 滑、小説時代と世話の筆、のそり、著述の趣意を、
 評、海内、後、勸善懲惡乃、筆流、感するに、
 愚、智、短、才、の、小、等、企、及、ふ、正、に、
 元、より、知、れ、ね、ど、着、録、親、生、の、
 の、す、め、に、任、せ、画、工、を、か、小、板、元、は、
 三、本、是、る、取、巻、筆、採、と、俳、優、の、
 文、政、七、年、甲、申、春、日、本、場、の、
 市川三升述





錢屋金埒

富士左衛門

國兼

題
 夢よるる花
 思ひはなほ色を
 夢にみよりの
 花を採り
 香をよそ
 あつた



千秋庵
三陀羅法師

隱岡の
お菊

喜も
 天に
 偽ちた
 の成
 かつた
 うきうき
 風が吹
 らる

洞雲院の
禪師
海通

和尚



似松乃
 横島軍平
 後小
 推貧屋
 欲右衛門
 菊野

菘の屋裏住

備前屋の遊女

菊野



浅草庵市人
 三子美八
 ひより
 雪江
 兼松が妻
 照葉
 兼松が
 三子
 三之助

兼松が妻

照葉

兼松が
三子
三之助





一のきのせがれまゝに
 ちやうど二のきのまゝに
 三のきのまゝに
 四のきのまゝに
 五のきのまゝに
 六のきのまゝに
 七のきのまゝに
 八のきのまゝに
 九のきのまゝに
 十のきのまゝに

一のきのせがれまゝに
 ちやうど二のきのまゝに
 三のきのまゝに
 四のきのまゝに
 五のきのまゝに
 六のきのまゝに
 七のきのまゝに
 八のきのまゝに
 九のきのまゝに
 十のきのまゝに



一のきのせがれまゝに
 ちやうど二のきのまゝに
 三のきのまゝに
 四のきのまゝに
 五のきのまゝに
 六のきのまゝに
 七のきのまゝに
 八のきのまゝに
 九のきのまゝに
 十のきのまゝに

一のきのせがれまゝに
 ちやうど二のきのまゝに
 三のきのまゝに
 四のきのまゝに
 五のきのまゝに
 六のきのまゝに
 七のきのまゝに
 八のきのまゝに
 九のきのまゝに
 十のきのまゝに



白牡丹

ついでにこれら
 松のふもと
 のゆい
 ちう
 ついでにこれら
 松のふもと
 のゆい
 ちう
 ついでにこれら
 松のふもと
 のゆい
 ちう



九
 ぐうとて十年の年月を
 りつては
 とし
 ら
 ぐうとて十年の年月を
 りつては
 とし

ついでにこれら
 松のふもと
 のゆい
 ちう
 ついでにこれら
 松のふもと
 のゆい
 ちう
 ついでにこれら
 松のふもと
 のゆい
 ちう



のんびり
 け
 け
 け
 け
 け

白
 組
 専

山にありては
松竹梅の
三友は
最も
めでた
しとい
ふも
なほ
松竹
の二
友は
最も
めで
たし
とい
ふも
なほ
松竹
の二
友は



山にありては
松竹梅の
三友は
最も
めでた
しとい
ふも
なほ
松竹
の二
友は
最も
めで
たし
とい
ふも
なほ
松竹
の二
友は

山にありては
松竹梅の
三友は
最も
めでた
しとい
ふも
なほ
松竹
の二
友は
最も
めで
たし
とい
ふも
なほ
松竹
の二
友は

山にありては
松竹梅の
三友は
最も
めでた
しとい
ふも
なほ
松竹
の二
友は
最も
めで
たし
とい
ふも
なほ
松竹
の二
友は



山にありては
松竹梅の
三友は
最も
めでた
しとい
ふも
なほ
松竹
の二
友は
最も
めで
たし
とい
ふも
なほ
松竹
の二
友は



△松のていつたての
がてんゆきずとた
まきずのちりの
くちうにのせんの
ちりのをれりゆび
わらせそんれはち
るりとよりあゆみ
さつさそめたのさ

△松のていつたての
がてんゆきずとた
まきずのちりの
くちうにのせんの
ちりのをれりゆび
わらせそんれはち
るりとよりあゆみ
さつさそめたのさ

△松のていつたての
がてんゆきずとた
まきずのちりの
くちうにのせんの
ちりのをれりゆび
わらせそんれはち
るりとよりあゆみ
さつさそめたのさ



△松のていつたての
がてんゆきずとた
まきずのちりの
くちうにのせんの
ちりのをれりゆび
わらせそんれはち
るりとよりあゆみ
さつさそめたのさ

△松のていつたての
がてんゆきずとた
まきずのちりの
くちうにのせんの
ちりのをれりゆび
わらせそんれはち
るりとよりあゆみ
さつさそめたのさ

遠 特
2378
346

三國志振傳下編

市川三升考述

五渡亭國貞画

申乃孟限世及瀨

仙鶴堂梓行

Handwritten text in vertical columns, likely a commentary or transcription of the main text. Includes various characters and symbols such as '四' and '六' in boxes.



○そのはらぬ
かり
乃雪



つきのかひをまじりておんぶを
ひきまわらうとけいふそののを
えけんわつておんぶくまうに
あるされされへへおんぶのを
くまされさそりもあま
をりてねこまをまらあ
ふらものをかんうらひあり
けるはそちあまこころるハ
いこころちあまの
しんこころつくとあまが
まうとまのねとやの
ありとま
あびる
あぞあ
をれの
いそい
めんせん
よひの
せまの
ありせば

五の
はな

此の狐は、昔、ある山に居り、
 人の世に化して、さまざまの
 事を行ふ。其の能く、人の心
 を知る。故に、人の世に化して、
 さまざまの事を行ふ。其の能く、
 人の心を知る。故に、人の世に化して、
 さまざまの事を行ふ。



此の狐は、昔、ある山に居り、
 人の世に化して、さまざまの
 事を行ふ。其の能く、人の心
 を知る。故に、人の世に化して、
 さまざまの事を行ふ。

此の狐は、昔、ある山に居り、
 人の世に化して、さまざまの
 事を行ふ。其の能く、人の心
 を知る。故に、人の世に化して、
 さまざまの事を行ふ。



此の狐は、昔、ある山に居り、
 人の世に化して、さまざまの
 事を行ふ。其の能く、人の心
 を知る。故に、人の世に化して、
 さまざまの事を行ふ。



Handwritten Japanese text in the upper portion of the right page, likely a narrative or dialogue related to the illustration.

Handwritten Japanese text in the lower portion of the right page, continuing the narrative or dialogue.

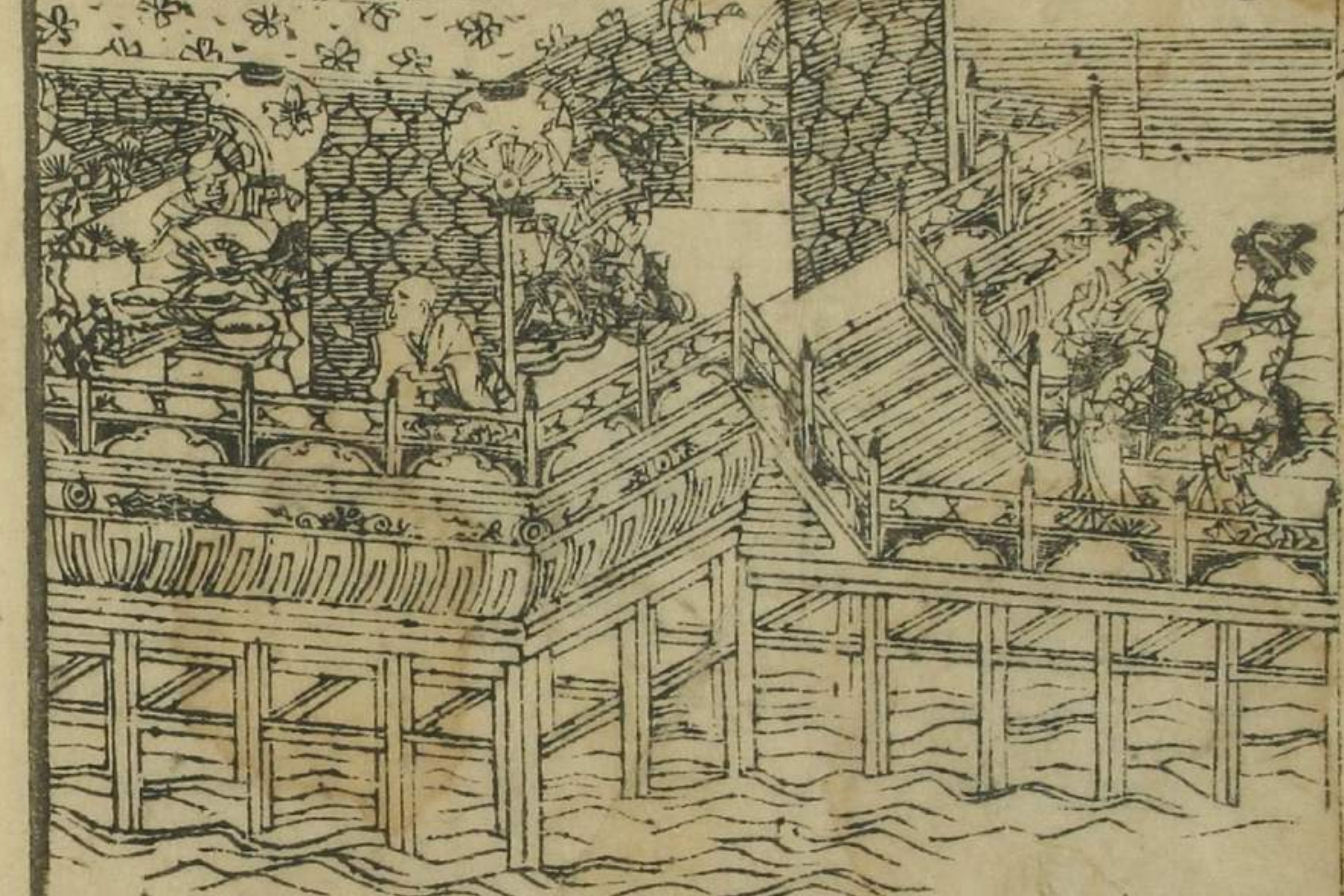


Handwritten Japanese text in the upper portion of the left page, likely a narrative or dialogue related to the illustration.

Handwritten Japanese text in the lower portion of the left page, continuing the narrative or dialogue.

此月 ぬき
 ぬき ぬき
 ぬき ぬき
 ぬき ぬき

二百五十年...
 一...
 二...
 三...
 四...
 五...
 六...
 七...
 八...
 九...
 十...



海月の
 子留
 留山を
 依来三浦の
 一...
 二...
 三...
 四...
 五...
 六...
 七...
 八...
 九...
 十...

Handwritten text in cursive script, likely a signature or name, written on a dark, aged paper cover. The text is arranged in two main lines, with a smaller mark above the second line. The first line appears to read "Handwritten text" and the second line appears to read "Handwritten text".